

9. Sacral chordoma の骨およびガリウムシンチ所見

—4 症例の経験から—

菅 一能 田中 伸幸 中西 敬
 (山口大・放)
 宇津見博基 山田 典将 (同病院・放部)

仙骨部の脊索腫 4 例の骨およびガリウムシンチを経験したので報告する。腫瘍の大きさは $7 \times 5 \times 4$ cm から $11 \times 9 \times 5$ cm までのもので、いずれも著しい骨破壊をともなっていた。骨シンチでは 2 例に腫瘍部での集積欠損とその辺縁部の小斑状の集積増加部位を認めた。他 2 例では明らかな集積変化は指摘されなかった。ガリウムシンチでは全例、異常集積を認めなかった。これまでのシンチ所見の報告と仙尾骨部の正中線上の悪性腫瘍の発生頻度を考慮すると、仙尾骨部の正中線上の悪性腫瘍を疑い、両方のシンチともに腫瘍部で集積性の乏しい例では、脊索腫を疑う必要があると考えられた。

10. ^{99m}Tc -GSA による肝予備機能評価

新屋 晴孝 白岩 美咲 奥野 恵子
 守都 常晴 松原伸一郎 金澤 右
 河野 良寛 清水 光春 竹田 芳弘
 平木 祥夫 (岡山大・放)
 永谷伊佐雄 (同・中放)

肝疾患患者 8 症例に対し 12 回、肝細胞アシアロ糖蛋白受容体に結合する新しい肝機能イメージング剤 ^{99m}Tc -GSA を投与し、その動態解析から肝機能診断法としての有用性の検討を行った。 ^{99m}Tc -GSA 1 mCi (185 MBq (5 mCi)) 静注後より心および肝に関心領域を設定し時間-放射能曲線を作成、その解析から HH15, LHL15, 肝摂取率を算出、さらに SPECT による肝集積率の定量的測定も行った。これらの値はいずれも従来の肝機能指標 (Alb, PT, HPT, KICG, ICGR₁₅) と良い相関を示し、 ^{99m}Tc -GSA 肝シンチグラフィは、肝細胞膜受容体に結合するという新しい観点からの肝機能診断法として有用であると思われた。

11. ^{99m}Tc GSA を用いた肝シンチの使用経験

津田 孝治 村瀬 研也 棚田 修二
 井上 武 最上 博 東野 博
 藤井 崇 飯尾 篤 濱本 研
 (愛媛大・放)
 赤松 興一 (同・三内)

肝細胞膜表面にあるアシアロ糖蛋白レセプターと結合し肝に取り込まれる新しい肝シンチ製剤、 ^{99m}Tc GSA を 21 名のびまん性肝疾患患者に投与し、肝機能診断薬としての有用性について評価した。心および肝に関心領域をとり、得られた TAC より receptor index として HH15, LHL15 を算出した。HH15, LHL15 は肝の予備能を示唆する検査値と良好な相関を認めた。一方、従来からよく用いられる 2 compartment model によるパラメータは相関が低かった。HH15, LHL15 は簡単な指標であるが、びまん性肝疾患の評価や予後の推定などに有用であった。GSA のイメージング製剤としてのみならず新しい肝機能診断薬としての可能性が示唆された。

12. 肝細胞膜レセプター結合性放射性薬剤 ^{99m}Tc 標識 Galactosyl Neoglycoalbumin による肝機能評価

合田真由美 高橋 一枝 小林 琢哉
 森 泰胤 影山 淳一 川崎 幸子
 大川 元臣 田邊 正忠 (香川医大・放)
 日野 一郎 (住友別子病院・放)

^{99m}Tc -GSA を用いた肝機能検査を 18 症例 (延べ 19 例; 正常 1, 慢性肝炎 9, 肝硬変 7, 肝腫瘍 1) に施行し、その有用性について検討した。GSA の肝機能指標には HH15, LHL15 {HH15 = $H15/H3$, LHL15 = $L15/(H15 + L15)$; H3, H15, L15 はそれぞれ 3, 15 分時の心、肝の総カウント数} を用い、疾患別、重症度別、他の肝機能指標 (ALB, BIL, PT, HPT, ICGR₁₅, SCORE) との相関についてそれぞれ検討し、肝集積度と重症度についても評価した。この結果、肝機能低下が進むにつれて HH15 の上昇、LHL15, 肝集積度の低下する傾向がみられた。他の肝機能指標とはいずれも有意な相関を示し、特に HH15, LHL15 と HPT との間には強い相関がみられた ($r = -0.757$, $r = 0.826$)。